

2016年
11月1日
No. 99
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト
高津達弘



会報は札幌市さぽーとほっと基金 木村弘宣ひまわり基金の助成により作成されています。

Index

- 2ページ LPF活動報告 SANGOの会の近況報告
「札幌市の就労支援について 行政担当者が説明」ほか
- 3ページ 走ること！それは生きていくための表現だ(前篇)
- 4ページ 発達障害的傾向・精神的困難を抱える当事者
就労後の生きにくさを語る
- 5ページ 特集: スペース・からころ
- 6ページ 当事者が語る家族のあり方／質問 Q&A コーナー
- 7ページ ひきこもり新聞が創刊 ほか
- 8ページ こちら事務局／編集後記

ひきこもりピアサポートに関わる 「当事者ニーズ調査」結果をまとめる

十月二十日、「それぞれの経験的知識が少なくひきこもりピアサポート」の講師陣5名が集り、当NPOが9月に実施したひきこもりのピアサポートに関わる「当事者ニーズ調査」結果について意見を述べ合った。

主な調査項目では、「当NPOが行うピアサポートを今後も受け続けていきたいか」の問いに対し回答数63件の約半数の29件が「わからない」と答え、ピアサポートに対する認知が乏しく期待と不安が入り混じる結果が鮮明になった一方で26件が「受りたい」と回答し、回答者の内訳では当事者と親が半数ずつを占めていた。「ピアサポーター養成研修に何が必要か」の問いに対しては「具体的な援助技法習得」が最も多く、ひきこもりサポートの実践力を重視する傾向が強いことが判明した。

これらの内容をもとに、各講師から意見を集約し、来年度末までに成果物を作成する。



(写真1) 右手前から宮武将大氏(一般社団法人 hito.toco 代表理事) 坂本凌雲氏(ひきこもりプレイス多摩代表) 田中敦理(札幌代表) 田中大悟氏(ひきこもり in 横浜代表) 泉 翔氏(NPO 法人ウィークタ イ代表理事)

SANNGOの会の近況報告

札幌市の就労支援について

行政担当者が説明

十月十九日開催の自助会SANNGOの会10月定例会は、札幌市出前講座パート2として札幌市経済観光局雇用推進部雇用推進課調整担当係長の外山大知さんと雇用推進係の山岸知志さんの二名が来られ「札幌市の就労支援について」説明があった。

札幌市の雇用情勢は平成21年5月リーマンショックの影響で有効求人倍率0.26の最悪な状況から徐々に回復、平成28年8月の段階では過去最高の有効求人倍率1.00を記録しているとの説明。一日8時間労働に縛られることなく二人で4時間を分担して労働を担うなど多様な働き方を取り入れる方向にあることが触れられた。

札幌市では就労を目指す人たちに寄り添った相談窓口として「あいワーク(北区以外の9区に)」と「札幌市就業サポートセンター(北区のみ)」を設置。求職者がとかく問い合わせしづらい求人票の情報内容を代わって企業に聞くきめ細かな橋渡しを行うサービスや個々の状況に見合った独自の求人を開拓するなど調整サービスを行っていることが述べられた。

さらに各種就職セミナーやスキルアップ講座のほか「何をどうはじめてよいかわからない」人たちに向けたスタートセミナーも開催するなど比較的短期で習得できるサポートも実施。実際の職場体験も5日〜10日間と短期

間で日当1500円を支給するという心身に負担がかりやすいひきこもり当事者にとっては都合のよいものも多かった。過去の事例では一度も就労をしたことがない40代の無職者が職業体験を通して就職が決まったケースもあることが報告された。

初秋の奥三角山々地域めぐり散策登山

九月二十九日、SANNGOの会有志メンバー4名で、初秋の三角山↓大倉山↓奥三角山↓小別沢口↓小別沢トンネルの自然歩道ルートを歩く地域めぐり散策登山を実施した。すでに山は実りの秋で、どんぐりが頭上から落ちてくる感じがしばしば。

三角山を後にして8番ルートへ。途中、ワシ目の標識がある旧小別沢トンネル付近の散策路でハエとりダケと知られるテングダケにも遭遇。また小別沢口付近でオオウバユリも見つけることができた。今回はよく登り下りして万歩計で二万歩以上ひたすら歩いた。



(写真2) 大倉山ジャンプ台から札幌市内を望む

走ること！

それは生きていくための表現だ（前篇）

ぼくは、過去に十代後半から約5年間ひきこもっていた経験がある。対人不安のようなものがあり、大勢の参加者が出場する大会に出ることができなかったが、ある友人と四年前にたまたま出会い、その友人のおかげで多くのマラソンの大会に参加できるようになった。そして今年の6月、函館の市民マラソンに出場することになった。

函館に行くのは中学3年生の修学旅行に行っていたので楽しみにしていた。大会の前日、友人と朝5時過ぎに札幌を出発し乗用車で6時間かけて函館に行った。函館の街並みは所々に洋風な建物があり、レトロな感じで明治時代を彷彿させる雰囲気がある。

函館ハリストス教会とカトリック元町教会に行ったとき、教会に漂う重々しい厳肅な雰囲気になにか魅了された。元町教会で誰も座っていない椅子を見たとき、昔この教会でクリスチャンたちの祈る神聖なエネルギーがそこに漂っているような気がした。入り口近くにあるフランスのルルドのマリアの絵画を観たときには、胸の辺りに暖かいものが流れ愛に包まれているような気持ちにもなった。

函館マラソンの当日。

北海道知事の高橋はるみがスタータ

ーを務め、ピストルの号砲と同時にランナーが一気に走り出す。吹奏楽のファンファーレと競技場にいる観客の沢山の拍手と大きな声援とともに6800名のランナーたちが競技場を駆け抜ける。スタートして前のランナーをどんどん追い抜いていく。一般のランナーに混じり、タレントで天気予報士の石原良純や公務員ランナーの川内優輝選手もゲストランナーとして出場していた。

市民マラソンのような街中を走るとの魅力は、なんといっても車道を思いっきり走れるところだ。なんともいえない開放感と自由を感じた。ぼくはこれから始まるマラソンという肉体の限界に挑む孤独のレースに足を踏み入れた。「ひきこもり」という十字架を背負い生きてきた自分の人生をぶつけてやるぞ」という想いで走ろうと思った。

何千人ものランナーの熱気と興奮で自分の心と体は静かに燃え上がってきた。街中の沿道で応援してくれる人たちを横目に走り集中していく。小雨で曇り空、風も強く気持ちが重く乗りにくかった。雨を心配し透明の簡易的なポンチョを着て走っているランナーが結構いた。街を抜けて住宅街に入りス



タートしてから6キロ付近、津軽海峡に面した漁火通が難関だった。突き刺さる雨と吹きすさぶ冷たい強風に煽られて気持ちが折れそうになった。

いつもマラソンで苦しい状態になったときに思い出す事がある。ひきこもっていた当時のことだ。16歳で高校を中退してひきこもっていた当時、意を決して外に出る時に大きな不安を感じていた。身体の中を棘のついた針金で強く縛り付けられるような苦しさや恐怖心に襲われるような状態で、いつも下を俯き逃げるように家に帰っていた毎日。生きることがつらくて仕方なかった。身も心もヘトヘトになり、少し外に出て走るだけでもこんな苦しい思いをしなければいけないのかと絶望したことがあった。

そんな自分を輝かせて自信を与えてくれたのがマラソンだった。子どものころから周りから「足が速い」と言われ、走ることは自信があった。走ることで自分という存在を認めてもらえた。走ることが自分の得意なことなのだ。その当時のことを思い返したとき、吹きすさぶ冷たい雨風なんてどうってことないと思えた。

（三十代男性）

—次号へつづく—

お知らせ

2000年5月から発行を続けてきた会報ひきこもりは、次号で第100号を迎えます。これを記念して紙面を12ページに拡充し、創刊号の会報から今号までの懐かしの記事をピックアップして歴史を振り返ります。

そのほか、10月に開催された助成金事業イベント「それぞれの経験的知識がたぐひきこもりピアサポート」。「当事者が求める支援を生きるのが楽になるために」「道産こもり179大学in津別」のレポートなどを掲載します。どうぞご期待ください。

札幌圏社会資源電子マップを作成
会報「ひきこもり」通信100号を
記念として札幌圏社会資源電子
マップ作成と、北海道ひきこもり
当事者連絡協議会サイト設置を含
め来年3月に現在のHPをワイ
ド・リニューアルする予定です。
これに伴う相互リンクをしてもい
いよーという当事者団体のみなさ
んを公募していきます。
よろしくお願ひします。

発達障害的傾向・精神的困難を抱える当事者 就労後の生きにくさを語る

11月3日、第33回ランチ会が札幌狸小路街「コテツ」で開催され定員20名を超える参加者で埋め尽くされた。講師は高校卒業後、場面緘黙でひきこもりを経験した大橋伸和氏（32歳）。自らの発達障害的傾向・精神的困難を抱える当事者として立場からの就職活動や社会生活について報告がなされた。ひきこもりからの回復にかかわる体験談はこれまで数多くなされるようになったが就労後の生きにくさや苦勞挫折体験談を聞く機会はまだまだ少なく、これからの支援のあり方を考えていく意味でも貴重であると思われた。

大学で学んだ特別支援教育や自身のこれまでの不登校ひきこもり経験を活かしたい、という明確な目標をもった大橋氏が選択したNPO法人の職場を1年半という短期でなげ離職しなければならなかったのだろうか。

◇消えないイージーミスティク

「大橋君に何を任せたらよいかわからなくなったよ」職場の上司からそう言われた大橋氏は職業生活に困り感が増大し焦りだけが高まっていった。

「このまま仕事が続いていくのか」目の前が真っ暗となり会社と同僚への申し訳なさや、この給料だけで果たして今後暮らしていけるのかという不安も重なり悩んだ末、今年自己都合で職場を退職した。

教員採用試験に落ちて家庭経済事情で民間企業への就労を検討していた大橋氏がハローワークで見つけて応募しすぐに採用されたのがNPO法人での経理事務だった。法人内で経理事務を担える人は誰一人としていなかったため、一手にその事務を任せられるようになった。NPOの会計ソフトは高額であったため独自の手法で経理事務を処理していくが記載ミスが多発し年度末決算に間に合わない事態に陥り無給で残業修正しなければならなくなったこともあったという。

また、上司から指示された内容を正確に理解できないイージーミスティクが連発。仕事に優先順位をつけることができず一つのことに完全に集中してしまうと本来やるべき仕事が完全に抜け落ちてしまい同僚に自分の管理をしてもらわないと仕事が進まない状況になってしまっていた。

職場では、自分が不安やパニックにならないよう静かな個室で休憩がとれるようにしてくれたり、病院の通院日は半日勤務を認めてくれたり、仕事上の悩みを一緒に考えてくれる時間をつくってくれたりなど一定の配慮がなされたが職業生活上の困り感を変えることは残念ながらできなかった。

現在は出身大学の学内雑談会やランチ会に参加しつつ職業相談で自分の職業適性把握や働く力の向上に努めている。

◇求められる小さな成功体験

こうした場面緘黙や発達障害的傾向・精神的困難を抱える当事者は結果的に「できない」ことが自己責任、努力不足で追い込まれていく。「社会に必要な人間なんだ」彼らにとって必要なことは、どんな状況であってもその人それぞれに役割があること、そして達成感を味わうことができる小さな成功体験だ。自分は場面緘黙だった小学校6年生のときの合唱コンクールでその当時の担任教師が与えてくれた役割が「指揮者」だった。言語以外のコミュニケーションツールがあるという選択肢が提示できることはとても大切ではないか、と大橋氏は語った。

■専門家の声—合理的配慮に不備も

当事者だけではなく支援者もまた途方に暮れる実態が浮き彫りとなった。今回の課題を挙げるとすればNPO法人の代表者を含めて主たるスタッフが経理事務をよくわからないまま大橋氏に全責任が渡ってしまったことにあるだろう。発達障害的傾向や精神的困難がある当事者の特性をつかみ、会計に熟知した税理士や公認会計士を顧問に置き、毎月経理処理が適正か否かをチェックできる丁寧な体制があればこのような事態を未然に予防できたかもしれない。合理的配慮が問われる。（文/写真 田中 敦）



（写真）体験談を語る大橋伸和氏

10月20日に開催されたひきこもり家族会「スペース・からころ」の例会には、雨の日にもかかわらず7名の母親が参加した。筆者は開始15分前から取材に訪れたが、既に代表の吉田容子さん（写真1）と母親数名が協力して受付や会場の和室の整備、お茶出しの準備をてきぱきとこなしていた。午後1時になり司会の岩隈さんの進行のもと、参加する母親一人ひとりが現在のわが子の状況を話し、それに対して吉田さんがアドバイスをしていた。一人につき約10分から15分とたっぴりと時間を使い、丁寧に受け答えをする吉田さんの姿が印象に残る。なお吉田さんと岩隈さんは家庭生活1級カウンセラーの資格を保持しているため、参加者は安心して対応してもらえる。



（写真1）代表の吉田容子さん

「スペース・からころ」は2002年にひきこもり当事者を抱える母親3人で立ち上げ現在に至る。吉田さんと岩隈さんは立ち上げからのメンバー。両者の信頼関係で結ばれている強みが発足以来約15年にもおよぶ例会の存続につながっていることは言うまでもない。参加者で10年以上通いつけている母親は、「言いつばなし、聞きつばなしだけの家族会では、具体的な子どもへの対応を教えてもらえないけれど、『からころ』では納得できるアドバイスを聞くことができます」と述べてくれた。当たり障りない話だけで進行するのではなく、当事者家族の抱える課題を掘り下げて今後の道筋を提示する力強い味方のような吉田さんに会うために「スペース・からころ」に参加する母親も多い。

「『たいへんでしたね』と労いの言葉をかけるのはだれでもできますが、当事者が一歩前進できるような指針を示すことが大事だと思います」と吉田さんはきっぱりとした口調で他の家族会との違いを強調していた。その言葉を裏付ける様に「この会に助けられました」「苦勞してきた親たちがそろっているの、いろんな経験談が聞けてそれが役立ちます」といった感想を参加者は述べていた。

毎月第1第3木曜日に開催している「スペース・からころ」では当事者の会が同時に開催され、毎回10名前後の参加者が家庭生活カウンセラーとともに生活上の悩みなどを語り合いながら交流している。以前、吉田さんが和室の後片付けをしていた時、はじめて参加した当事者を見かけ「テーブル持ってくる」と頼み、快く応じた当事者と二人で運んだことがある。何気ない誘いかけで手伝いをしてくれた当事者の一面を垣間見て「当事者にとって外部との接点になるきっかけづくりにもなっています」と吉田さんはあたたかい眼差しで答えてくれた。

この日参加した母親の中には夫に先立たれた方が複数人もあり、着実に親亡き後の生活設計を考えなければならぬ切実さを感じた。「スペース・からころ」の最終目標は「当事者の自立」。吉田さんは「兄弟に負担をかけさせてはいけません」と述べ、この例会が親自ら行動し子どもの生きていく道筋をつけてあげる姿勢が顕著に伺えた。

参加者同士が顔見知りになるために月2回例会を開催し、椅子やテーブルに囲われることで閉塞感に襲われることを避け、畳敷きの和室（写真2）を使用し場の雰囲気づくりにもこだわりがみられる。

参加者の多くが広汎性発達障がいや統合失調症などの疾患を抱え、医療機関に通院または入院している当事者が多い。「何らかの障がいの原因でひきこもるのです。そのままの状態では改善はしません」と吉田さんは力説する。一見すると障がいという重々しさを連想するが、例会の雰囲気はいたって明るく、障がいをオープンにすることで参加者の気持ちを浄化させてくれる作用もある。吉田さんのもつ人柄が参加者の連帯を生み、親が一丸となり課題解決へ向けて歩んでいるように思えた。



（写真2）清涼感漂う会場の和室

スペース・からころ

開催日時：毎月第1・3木曜日 13:00～16:00

開催場所：かでの2・7 6階・和室

住所：札幌市中央区北2条西7丁目

アクセス：地下鉄大通駅2番出口から徒歩11分

会費：1か月2回分500円（1回のみ参加でも500円です）

問い合わせ先：090-1389-2489（吉田代表）

※ご来場の際は公共交通機関をご利用ください

当事者が語る家族のあり方

時間軸を超えてみえてくる親子関係

吉川修司

私の両親は既に亡く、一人暮らしをしています。思い返せば生前の親との関係は良好とはいえず、特に父親との間には遠い距離感がありました。その原因の一つは、親が望むような社会へ出て働き、賃金を得てこなかったことが最大の原因でした。

親、特に父親というものは、ある年齢に達した子どもを投機物とみなし、小さいころから多大な教育費を費やすことにより、子どもを社会へ巣立たせることで、見返り（運用益）を得ようとする考えがあるように思います。だからこそ、わが子が順調に社会人として成長するためには尽力しますが、一旦ひきこもりのような状態で生産性のない生活を始めると、不良債権として無視しようとする傾向があります。

昭和の高度成長期を休みなく生きてきた父親にとって、何一つ生産しないで部屋にいたわが子を理解することができないのは、父親が生きてきた時間、効率性を重視した時間軸の中で前進してきたのに対し、子どもは、非効率性を重視した時間軸の中で同じような日々を生きているからで、それぞれの時間軸が壁となり親子関係に軋みが生じこの軋みを解消することは、生き

続けてきた時間軸を180度乗り越えない限り難しいため、最終的に親子関係に折り合いがつくことはありませんでした。

しかし、父親が病気で残り数か月の命だと判明したとき、父親と私の間にスレていた時間軸をお互いに超えようとする瞬間がありました。

病気により立って歩くことができなくなったことへの悔やみは、スポーツや旅好きな父親にとって、効率性を重視した暮らしで得た地位や名譽をもってしても解消することはできません。結局は失敗した子育てにより不良債権化したわが子と二人で歩く練習をするようになったわけですが、一瞬でも互いの時間軸という壁が少しでも解消されたような気がします。

私は来年で50歳になりますが、親が残してくれた資産により生きながらえてきた部分が大きく親は死後も私を養ってきたといえます。この屈折した現状とひきこもりピア・サポートの活動を通して他のひきこもりの方たちの状況に接したとき、あらためて当事者を持つ親の苦悩が身に沁みます。

「効率」と「非効率」。この二つの時間軸が親子を分断していたとすれば、あえて「非効率」な人生の中にも新たな生き方や価値があると信じ、人生の下り坂を歩んでいきます。

Q 長くひきこもり続けてきた高齢ひきこもり当事者が、社会参加するために必要なことは何でしょうか。社会参加としてNPOでの活動がありますが、一般就労と比べ何が利点となるのでしょうか。また、ひきこもりピア・サポーターとして活躍する当事者もいますが、当事者が支援する意味とは何でしょうか。

A (ピア・サポーター田中 敦)

今日ではボランティアも社会参加と理解できますからそのとらえ方は幅広くひきこもり当事者がやろうと思えばできることは身近でもあると考えられますが、あえて必要なことを一つあげるとすれば「セルフケア」を心掛けることでしょうか。やりたい仕事であっても体調不良で続けられないは本人にとっても残念なことです。その意味でNPOの働き方は自分の都合に合わせて柔軟に活動でき「定年がない」というメリットがあります。高齢ひきこもり当事者次第によっては新たな生き方をつくりだす原動力になりえる可能性があると思われれます。これは上から与えられる一般就労ではありえないことです。個人的な経験でいえば企画立案力やNPO会計基準などの公益法人を運営するうえで必要な不可欠な事務処理能力を高められたことは経験上大きくどこに行っても通用するものと

思っています。私たちNPOは過去に不登校やひきこもりの経験をもちたピアな人たちが構成されています。ピアサポートは支援の名のものの援助技術を本来指すものではなく、その精神的な構造、「構え」を意味するものです。ピアな人たちが織りなす関係性の中にピアサポートの源流があるといえるでしょう。

Q 四十代ひきこもりの子どもを持つ親です。十年ほどひきこもっていますが、健康が阻害されているような気がして心配です。歯が痛くても歯医者にも行きません。どうしたのかと思案しています。

A (ピア・サポーター吉川修司)

ひきこもる方が歯科医の受診を嫌う理由の一つに、治療において歯科医と顔をつき合わせるため、より以上の緊張があると思われれます。ひきこもり生活のQOL(生活の質)を上げるためにも健康の維持は大切なことなので、お子さんが歯科に行けるために普段の生活を見直し、どのような対応をすればよいかを考えてみてください。不登校・ひきこもり等の当事者と家族への支援を実践している丸山康彦氏の著作「不登校・ひきこもりが終わるとき」が参考になると思います。読んでみてはいかがでしょうか。

ひきこもり新聞が創刊！

ひきこもりを経験した人たちがつくる「ひきこもり新聞」が、11月1日に創刊されました。新聞はタブロイド判・8ページ。隔月発行・定価は当事者が100円、それ以外は500円。インターネット上でも読むことができます。<http://www.hikikomori-news.com/>

編集長で全国ひきこもり当事者連合会代表理事の木村ナオヒロさん（32）は、十代後半からひきこもり経験があります。木村さんは10月30日、当NPO主催の「ひきこもりピアサポート」を取材。翌日には田中理事長へのインタビューを実施（写真）。取材内容は来年発行の第2号で紹介される予定です。



取材には、編集長の木村ナオヒロさん（中央）のほか、ひきこもり外交官・さえきたいちさん（右）などが参加した。



ご寄付ありがとうございます

札幌学院大学人文科学科教授の二通 諭先生より5万円の寄付金を受け取りました。また、記念切手52円を50枚利用者の保護者から受け取りました。団体活動を円滑にすすめていくために活用していきます。

応援クリックによるご寄付をお願いします！

NPO 法人レター・ポスト・フレン相談ネットワークでは、みなさまからの寄付など支援をお待ちしています。

インターネット応援サイト gooddo（グッドゥ）のページ内からも支援いただくことが可能です。ワンクリックで団体に課金されるシステムです。ご支援よろしくをお願いします。

<http://gooddo.jp/gd/group/letterpost/>

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり当事者が社会に出たとき、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり当事者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

会 費

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000円	入会金 1,000円	一口 1,000円～
年会費 3,000円	年会費 2,000円	

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

◆「SANGOの会」例会のご案内

2016年12月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《通常例会》

と き：12月7日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター3階 第三会議室

《初心者例会》

と き：12月21日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター4階 ボランティア活動センター 活動室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目 (地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)



◆北海道ひきこもり問題を考える実行委員会主催『こんあきおの“ひき”語り』

「音楽がひきこもりの自分を元気にしてくれた」現在、歌う精神保健福祉士として路上ライブやイベントで精力的に音楽活動をする今昭王さんをお招きしてトークを交えながらさまざまな思いを込めて歌います。

と き：12月18日(日) 午後1時00分から午後4時00分まで

会 場：日本基督教団 東札幌教会 講堂

住 所：札幌市白石区菊水1条4丁目6-36 (地下鉄東西線菊水駅下車徒歩約10分)

参加費：お一人500円 ※事前申し込み不要

お問い合わせは、北海道ひきこもり問題を考える実行委員会 事務局 TEL: 011-811-0292 担当:黒田さんまで。

◆手紙(絵葉書)によるアウト・リーチを募集中

公益財団法人北海道地域活動振興協会平成28年度ボランティア活動支援事業「長期在宅ひきこもり当事者への交流活動促進事業」として平成28年10月から来年2月末日まで、手紙(絵葉書)によるアウト・リーチを拡充して実施します。ひきこもりの当事者宛へ絵葉書を送ります。切手代などの利用料は無料です。希望者は事務局まで連絡ください。



☆ひきこもりピアサポートの標準テキストとして☆

苦勞を分かち合い 希望を見出すひきこもり支援
~ひきこもり経験値を活かすピア・サポート~ 田中 敦著

本体 1800円+税 A5版 156ページ 学苑社

団体に直接お申し込みの方のみ、1,800円【送料別途】で頒布しています。

☆ 編集後記 ☆

今年度の主要な事業がすべて終わろうとしています。近年は道内からだけではなく全国から私たちNPO実践が注目されるようになりました。それは数々の報道となって顕在化しております。その一方で事務局の事務量は膨れ上がりました。事務局体制の整備はこれからの大きな課題だと思っていますがその基盤をなす予算づくりが必要です。皆さまのご寄付を心からお待ちしています。(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください